

新切間歩

石見銀山の歴史を通じて、鉱夫たちにとっての最大の課題の 1 つが、銀鉱山から水を抜くことでした。坑道が長く深くなるにつれ、岩の中の地下水のたまり場に突き当たって出水が起きることは避けられず、これが鉱石の取り出しを妨げていました。1700 年初頭までに地下水の問題は大変深刻となり、江戸（現在の東京）の中央政府の出先機関である現地の代官所は、鉱山経営を維持するために行動を起こす必要に迫られました。その解決策となったのが、既存の採掘地よりも低いところに、新たな坑道を平行に 2 つ掘ることでした。水は、互いに接続しているこれらの新しい坑道を通じて流れ落ち、川へと放水されます。新切（「新しく切る」の意。トンネルが山麓に水平方向に切り開かれているため。）と呼ばれるこの野心的な事業は、幕府からの貸付によって資金調達され、1720 年代に完了しました。

新切プロジェクトは成功でした。この排水システムにより、新たな銀鉱脈が発見され、既存の坑道でもより効率的な採掘が可能になりました。鉱脈は新切間歩内でも発見され、間歩の 1 つは採鉱が行われるようになり、もう 1 つの間歩は排水と換気の機能を果たすようになります。その結果、限られた期間ではあったものの、石見銀山での銀の生産量は大幅に増加します。新切間歩は、一世紀近くにわたりほぼ手付かずの状態に残されましたが、今でも水を集め、銀山川へと排水しており、建造者たちの優れた土木技術を今に伝えています。